あの夏のペルセウス

y.k.SoundGarden 小冊子

谷一　著

その年の夏は、観測史上最高気温を記録するほどの、うだるように暑い日が続いた。
空はどこまでも高く、強い日差しはじりじりと肌を焼く。日差しを避けようにも、遮蔽物のない学校の屋上では頭上から降りそそぐ日光から逃れられない。ここに居るだけで、身体から汗と体力が出て行くような気がする。その証拠に、僕のシャツはぐっしょりと濡れていて、腹ばいになっている地面にはうっすらとしみができはじめていた。
僕は用意していたスポーツドリンクで喉を潤し、汗でベトベトになっている腕で口元を拭いた。それから空になったペットボトルを横に置いて、大きなレンズを付けたカメラのファインダーに目を近づけた。学校の向かいにある、小さな病院を見るために。
「あ、やっと見えた……」
どこか黄色がかった、小さな枠の向こう。
灰色の外壁が囲う、白いカーテンのたなびく横で君は、腰まであろうかという黒髪を揺らしながら、どこか遠くを見つめている。
約一ヶ月前。その、全てを諦めたような瞳に、一目見た時から僕は心を奪われていた。それからは、時間があればいつだってこうして彼女を見に来ている。これだけ長い間入院しているのだから、彼女は重い病気を患っているのかもしれないなと思う。だけど、それを確認するすべを、僕は持ちあわせていない。
お互い、こんな距離に居るのだ。会いに行くことは不可能じゃない。
けれど、臆病な僕がそれを咎める。
だから、勝手かもしれないけれど、僕はこのファインダー越しの距離でしか彼女に会えなかった。
ふう、と小さく息を吐いて、僕は右手の人差指に力を込めた。ボタンの押し込まれる感覚の後、カシャリとシャッターの切れる音がする。
カメラの中にフィルムは入っていないけれど、これはある意味、儀式みたいなものだった。
高いレンズを買ったせいでフィルムを買えないほどにお金に困窮した僕は、こうして彼女にレンズを向けてシャッターを切ることしかできなかった。
よし、今日はもうこれで帰ろう。そう思った時だった。
彼女と目が合ったのは。
心臓が跳ね上がるような気がした。
恐らく2、3秒、僕は彼女と目線を合わせたまま硬直していたように思う。
「や、やば……」
僕はおもむろに立ち上がり、慌てて隣に置いてあったカバンの中へカメラを押し込もうとする。
けれど、カバンに付けられたネームキーホルダーが引っかかって、うまく閉まらない。
くそっ。僕はいらないって言ったのに、母さんがこんなの勝手につけるから。

カバンに無理やりカメラを詰め込み、おもむろに地面を蹴って屋上から一階へと続く階段を駆け下りた。
家に帰ってからも、その動機は止まらなかった。いつ終わるとも知れぬ不安を胸に抱えたまま、僕は眠れない夜を過ごした。

次の日。
僕は相変わらず、学校の屋上に来ていた。ずっと家で悩んでいたせいで、自転車に乗って学校に着いた時には夕方を過ぎていた。昨日、彼女と目が合った瞬間から止まらなかった動悸も、今となっては落ち着いている。
いつもの通り僕はカバンからカメラを取り出し、向かいの病院を見られるように準備をした。
しかし、ファインダーを覗いても彼女の姿はどこにもない。
「やっぱり、見られてたのかな」
そう思うと、急に不安な気持ちに駆られた。喉がカラカラになって、胸の奥の温度が急激に下がったような気がする。
やっぱり、これまでがおかしかったんだ。
こんな、実際には撮ってないといえど、盗撮まがいのことをして……。
もう、こんなことはやめよう。彼女のことは忘れて、僕は普段の生活に戻ればいい。
普通に学校に行って、普通に風景の写真を撮って。そうすれば、彼女は僕が見た夢だったんだ。そう思える日が来るはずだ。
感情を押し殺すように、僕はゆっくりと息を吐いて、震える手でカメラのバックに手をかけた。自分の気持を封じ込めるようにそっとカメラをしまい、僕は屋上のフェンスから後ずさる。
その時だった。
背後から、ドアの閉まる音が聞こえたのは。
な、なんだ……。
夏休み、こんな場所に来るのは、僕くらいなものだと思ってたのに。
もしかして、彼女が通報して誰かが僕を捕まえに来た、とか。
驚きと極度の緊張で、僕はその場から一歩も動けなくなってしまった。足は震え、胃液が逆流するような感覚がして、酷く気分が悪くなる。
そうしているうちに、背後からは一歩、また一歩と足音が近づいてくる。そのゆったりとした歩調が、僕の焦燥感をより駆り立ててゆく。
に、逃げないと。でも、どうやって。
ここは屋上だし、
出口は一つしかない。逃げたとしてもすぐに捕まってしまうだろう。僕はそんなに脚が速いほうじゃない。
足音は、もうすぐ後ろまで迫っていた。

こうなったら、もうどうなっても知るものか。僕は意を決し、フェンスへ向かって一直線に駈け出す。背後から息を飲むような音が聞こえたが、僕は気にせずフェンスに手をかけた。
錆びた鉄のザラザラとした感覚が、手のひらから伝わってくる。そのまま僕は、けたたましい音を立てながら必死にフェンスを登っていく。
よし、もうすぐだ。もうすぐで、フェンスの頂上に手が……。
「あんた、なにやってんの」
女の人の声だった。それも、とびきりかわいらしい。
背後から聞こえた声に気を取られた瞬間。僕はフェンスを掴み損ねた。
一瞬、身体が浮くような感覚の後、ぐるりと反転した視界のまま、僕は屋上の地面に落下していく。
受け身を取る余裕もなく、背中に鈍い衝撃が走る。息ができなくなり、僕は背中の痛みをこらえるために身体を丸めた。太陽に熱せられた地面が右頬に触れて、熱い。
段々と、意識が朦朧としてくる。落下した時に、頭を打ったのかも知れない。
「はぁ、ダサすぎ……」
頭上から、さっきも聞こえた声が降ってきた。
ぼんやりとした意識の中、顔を上げるとそこには黒
く長い髪の、白いパジャマを着た色白の少女が居た。彼女の背後から照らされている夕日が逆光になっていて、顔がよく見えない。
君は誰。そう聞こうと思っても、肺の中の空気が空っぽで上手く発音できなかった。
「金魚みたいに口をパクパクさせるだけじゃなくて、ちゃんと喋りなさいよ」
再度、刺のある声が降ってくる。
呆れているのか、彼女は頭に手を当てて首をかしげた。
「ほら、早く立ちなさいよ、みっともない」
そう言って、彼女はこちらに手を伸ばしてくる。
なんで、僕に手を……。　彼女の意図がよくわからない。姿を見る限り、僕を捕まえに来た人じゃなさそうだけど。
僕は差し伸ばされた彼女の手を見た。その手は、触れば簡単に折れてしまいそうなほどに細い。ようやく息苦しさから開放された僕は、フェンスを掴んでよろめきながら立ち上がった。
それを見た彼女は手を引っ込めて、僕に背中を向ける。ふわりと浮いた彼女の長い髪が僕の鼻をかすめていき、清潔そうな石鹸の香りが僕の鼻に届く。
その匂いは、どこか病室と似ていた。
「なんだ、自分で立てるんじゃない。ほら、行くよ」
「どこに」
僕は腹の底から声を絞り出して、僕に背中を向けた人物に聞き返した。本当はもっと聞きたいことはあった。けれど、今の僕にはこれが限界だった。
「いいから。もたもたしないの」

そう言って彼女は、唐突に僕の手を取った。
「え、ち、ちょっと待ってよ」
君は一体、誰。そう聞こうとした瞬間、彼女が僕を振り向いて、目が合った。背の低い彼女の、上目遣いで向けられた真っ黒で大きな瞳が、僕を射抜いた。
思わず僕は息をのむ。
「まだ、なんかあるの」
「い、いや」
「なにもないんじゃない。引き止めたくせに」
彼女は強引に僕の手を引くと、屋上の扉に向かって歩き始めた。
なんで彼女が……。ずっとファインダーの向こうで、見つめるだけだった彼女。
それが今、目の前に居る。
思考がまとまらないまま、僕は彼女の歩調に合わせてついて行く。
扉を抜けて階段を降りて行く間、僕はずっと、前を歩く彼女の揺れる黒髪を見つめていた。

気づけば僕は彼女を自転車の後ろにのせて、夕暮れ迫る町の中を走っていた。
走行中、僕は何度か後ろに向かって話かけたけれど、彼女からは「いいから自転車こいでてよ」とか、「黙ってて」とか言われるばかりで、なにも聞き出すことができなかった。
「あの、このまま行くと山なんだけど」
「いい。気にせず行って」
僕の意見なんか、一切無視。意見しようものなら大変な目にあいそうな気がして、言い返せなかった。
ただ、一つだけ彼女から質問してきたことがあった。
「ねぇ、あんた。アポロドロスって知ってる」
「いや、知らないよ。なんのこと」
「じゃあ、いい。知らないなら」
それきり彼女は黙ってしまう。彼女がなにを言いたかったのか気になったけれど、聞き返してもどうせつれない返事が返ってくるだけだろうと思った。
ともかく僕は、無心でペダルをこいだ。
上り坂に差し掛かれば、体重をかけて息を荒くしながら。下りはブレーキに気をつかいながら。自転車を走らせた。
そうして僕らは、山にたどり着いた。
「ここからは、歩かないと先に進めないけど」
「そう。じゃあ、おぶって」
「え、なんで僕が」
「いいでしょ、それくらい」

「でも、僕だって自転車をこいで疲れてるし」
「へぇ、それぐらいでへばっちゃうんだ。ほんと、だらしない」
その言葉にむっとした。これでも一応男子だし、自転車通学で体力もそれなりにあるつもりだ。
「わかったよ。おぶればいいんでしょ」
僕はその場にしゃがんで、おんぶの体勢になった。
「物分かりは早いんだね。そういうのは、まぁ好きだよ」
好き。その言葉にどきりとする。一気に顔が熱くなる感じがした。
ぼうっとしていると、彼女の細い腕が僕の首に回された。パジャマの柔らかな生地が首にあたって心地いい。
「意外と、ぺたんこなんだな」
「なにか言った」
「ご、ごめん」
耳元で、彼女の声がした。
相変わらずの不機嫌そうな声だったが、耳に届いた吐息が心地よくてあまり気にならなかった。こんなの、初めての感覚だ。
「なに、まだ立たないの」
彼女の辛辣な言葉にも、段々と慣れてきた。やれやれと思いながらも、僕は膝を伸ばす。
「あれ……」
「なんなの、変な声だして。重いとか言ったらぶっ飛ばすから」
驚いた。重い、なんてもんじゃない。
軽かった。恐ろしいくらいに。羽みたいに軽くて、そこに居ることすら忘れそうだ。
「どうしたのよ。なにも言わないなんて、ちょっと気になるでしょ」
それは初めての彼女から発せられた、不安そうな声だった。
「いや、なんでもないから」
僕は彼女を背負いなおして、暗くなり始めた山の中へ歩き始めた。
山の中はそれなりに整備されていて、歩きにくくはなかった。それでも傾斜があるため、疲れた足に鞭を打ちながら山を登っていく。
「あの、まだ登るのかな」
「当たり前でしょ。頂上まで行くんだから」
「それ、マジで言ってるの」
「大マジ」
「うへぇ」
山道はすでに暗くなっており、いくら整備されてるとはいえ、これ以上なんの装備もなしに登り続けるのはさすがに厳しい。だけど、初めて彼女と会って、初めて彼女に触れて、初めて会話を交わしただけなのに。それでも僕は、なんとしても願いを叶えたいと思ってしまうのだ。

どうしてそうしたいのかは、よくわからない。それはある意味、彼女に対するこれまでの行為の贖罪なのかもしれないし、あるいは……。
いや、これ以上考えるのはよそう。
今はとにかく、足を動かすことだけに集中すべきだ。

何時間歩いたか、わからない。疲労で意識が遠のきかけたところで、一気に視界が開けた。
それと同時に、背中の彼女がもそもそと動き始めるのがわかった。ということは、ここが山頂なんだろう。月はなく、空には一面に星が煌めいている。広く開いた木々の間からは、遠くに僕の住む街の明かりが見えた。
「やっとついたのね。なにしてるの。早く降ろしてよ」
「はいはい」
僕はその場で膝を曲げて、彼女を地面に降ろした。
彼女はそのまま、ゆったりとした足取りで山頂の広場を歩く。
「まったく、お礼もないのな」
僕は一言、聞こえないように悪態をついてから、その場に座り込んだ。地面の草は少し湿っていて、おしりがひんやりとする。どこからか吹いてきた風が、僕の火照った身体を程よく冷やしてくれる。夏だというのに、ここはとても涼しかった。
町から離れているためか、聞こえてくるのは風の揺らす葉擦れの音だけだった。その音に耳を傾けていると、ふいに彼女の声が聞こえた。
――っていうんだ、私の名前。
「今、なにか言ってたの」
「もしかして、聞いてなかったのね」
「ごめん」
「もう」
彼女は少し困ったような悲しいような顔をして、頬をふくらませた。意外と、こういう顔も可愛いんだな。
「そういえば」
さっきはなにを言おうとしてたの。
そう聞こうとした時、彼女は夜空を見上げて指さした。
どうしたんだろう。僕はそれにつられて、彼女と同じように夜空を仰いだ。
なんだ。なにもないじゃないか。僕をからかおうとしたな。彼女に抗議の声を上げようとした瞬間、夜空を横切る一筋の光が見えた。
「綺麗だ」
知らぬうちに、僕は感嘆の声を漏らしていた。
「そうでしょ。わたし好きなんだ、流れ星が。綺麗で、潔くて」

いつの間にか彼女は僕の右隣に座って、僕と同じように空を見上げている。その表情は、いつも僕が屋上から見つめていた時と同じだ。

彼女はあれからなにも言わない。だから、僕も無言で夜空を見つめた。

一つ、二つ、三つと流れ星が現れては消えてゆく。その勢いは衰えることなく、むしろ間隔が短くなっているようにも見えた。

「星乃、小夜」

「え」

「だから、わたしの名前。さっき、あんた聞いてなかったでしょ」

「あ、ああ」

少しの逡巡の後、あの時僕が聞きそびれた言葉はそのことだったのかと、ようやく気づく。

「今日は星が綺麗だから、その、特別に教えてやったんだから」

「はは、そうだったんだ」

「なに笑ってんのよ。気持ち悪い」

「気持ち悪いなんて、そこまで言わなくてもいいじゃないか。ひどいな」

「ひどいのはそっちでしょ。屋上からわたしのこと盗撮してたくせに」

「あ、あれは違うって」

「どう違うの」

小夜は大きな黒い瞳で、僕の顔を覗きこんできた。その、心の中まで見すかされそうな眼光を前に、僕は押し黙ってしまう。お互いの息がかかりそうな距離まで顔を近づけられて、僕の心臓は自然と鼓動を速めた。

「ほんとはね」

ふいに、小夜は僕から目線を外して、そっとそうこぼした。それから、再び空を見上げる。

「別に嫌な気分じゃなかった」

消え入りそうな声だった。

「それはどういう」

「わたしを見てくれる人、誰も居なかったから」

「お見舞いに来る人とかは、どうだったの」

小夜は、無言で首を縦に振った。

「だから、あんたが。朝日が、わたしを見てるのに気づいた時、ちょっと嬉しかった」

「ちょっと待って。なんで、僕の苗字を」

「それ」

小夜は顎でしゃくって、僕の隣を示した。そこには、僕のカバン。

「そっか、キーホルダーで」

すっかり忘れていた。忌々しいとばかり思っていたものだったけど、今回ばかりは役に立ってくれた。それだけは、感謝しなくちゃいけないな。

「でさ、なんで朝日はわたしのこと見てたの」
「それは」
一目惚れだったから。なんて、そんなこと言えるわけがない。なんだか僕は気恥ずかしくなって、黙って空を見上げた。
流星雨は先程よりも量を増して、真っ黒なキャンパスに多彩な線を描いてゆく。
「そう、言えないんだ」
「ごめん」
僕は小夜の顔を見ずに、そう答えた。
「病室でね、目の端に光が見えたんだ」
ポツリと、小夜が言う。
「お父さんもお母さんも、誰も来てくれない、からっぽの部屋から光が見えたの。最初は、お迎えがきたのかなって思った。でも、それは違って。ちらっと目を向けたら、そこには朝日が居た」
「それって、いつから」
「かなり前。一ヶ月くらいかな」
そうだったのか。知らなかっただけで、小夜はずっと僕に気づいていたんだ。そう思うと、少しだけ心が軽くなった。
「最初は、変なやつだなって思った。あんなところでカメラを構えてるなんて、馬鹿じゃないのって。見るからに、わたしを狙ってるみたいだったし」
「そのことに関しては、本当に申し訳ないと思ってるよ」
「別に、もういいよ」
ぶっきらぼうな言い方だったけど、その声にはあまり刺を感じられなかった。
「すぐやめるのかなって思ってたけど、次の日もその次の日も居るんだもん。雨の日も居た時は、正直笑っちゃった」
「は、はは」
確かに、そんな時もあったな。翌日は高熱が出たにも関わらず、僕は必死に学校に行った記憶がうっすらとある。
「その時、思ったんだ。世の中には、こんな馬鹿な奴が居るんだなって。それからだよ。わたしが朝日のこと、気になりだしたのは」
「えっと、気になりだしたっていうのは、どういう」
「い、いいでしょそんなの。もうやめよ、こんな話」
小夜はおもむろに話を断ち切って、押し黙ってしまった。気まずい沈黙が続く。
僕は耐えきれなくなって、思いついたことを口にした。
「そ、そういえばさ、アポロなんとかってなんだったの。ほら、自転車に乗ってた時に言ってた」
「アポロドロス」
「あ、そうそう。それだよ」

「古代ローマ時代の著作家なんだって。ギリシャ神話の本とかを書いてた」
「そうなんだ。でもやっぱり、なんでそれを聞かれたのかわからないな」
「ほんっと、鈍いんだから」
小夜の不機嫌そうな声が耳に届く。なんだか、遠回しに馬鹿にされたような気がする。
「ギリシャ神話の神様って、星座になってるのはさすがに知ってるでしょ」
「うん」
「その中に、ペルセウスっていう星座があって。その星座の近くで、流れ星が飛び交う時期がある。それが、ペルセウス座流星群っていうの」
ここまで聞いて、僕はやっと合点がいった。
そうか。今日がその日だったんだな。一応、話には聞いていたけど、実際にこうやってじっくり見るのは初めてだった。
「それで、この流星群を見せるために、僕に会いに来たの」
「なっ、なに言ってんのよ。そんなわけないじゃない」
一蹴された。さすがに、ちょっと落ち込むな。
「でも、こうやって誰かと一緒に星を見られて、よかったなとは思うよ」
「じゃあ、僕じゃなくてもよかったんだ」
「当たり前でしょ、そんなの」
またもや、落ち込む一言。さすがにちょっと辛くなってきた。
「うん、これでよかった。本当に。もう、悔いはないから」
悔いはない、なんて。どうして。
「これからは、また、あの部屋で、独りで、流れ星みたいに消えていけそう、だから」
とぎれとぎれに紡がれる小夜の言葉は、震えていて、悲しみを押さえ込んでいるように聞こえた。
そんな小夜の言葉を聞いて、僕は形容しがたい怒りにかられた。
なんで、どうして小夜みたいな女の子が、世界の果てに居るかのような寂しいことをつぶやかなきゃならないんだ。それも、笑いながら。
こんな笑顔、初めて見た。
「だったら僕が毎日、小夜の病室にお見舞いに行く」
「はあ、あんたなに言って」
「うるさい、そんな顔するなよ。小夜みたいに可愛い子が、そんな悲しそうな顔するとこみたくないんだ」
僕は一体、なにを言ってるんだろう。ほとんど初対面の女の子に対して、告白めいたことを言って。正直、顔から火が出るくらい恥ずかしい。それでも、これが自分の気持ちだった。
「一人が寂しんでしょ。誰にも知られずに消えていくのが怖いんでしょ。だったら、僕がいつでも側に居る」
「そ、そんなわけじゃ」

「嘘だ。それは嘘」
「う、嘘なんかついてないってば」
「いや、嘘ついてる。だってさっきから、なにかを我慢してる顔をしてるじゃないか。きっと、今まで小夜は辛くてもそうやって、自分の本音を隠してきたんだ」
僕は、小夜の本音を聞き出したかった。何重ものベールに覆い隠された、心の声を聞きたいと思った。だから僕は、これまで直視できなかった小夜の目を真っ直ぐに見つめて、そう言い放った。
それを聞いた小夜は二、三度肩を震わせ、僕から目をそらし両腕で自らの膝を抱いた。まるで、小動物が身を守る時のように。
その姿を、僕はひたすら見守った。さっきの言葉が、僕の本音全てだった。これ以上なにか言えば、それは上辺だけの薄っぺらい言葉に過ぎないと思う。
小夜に言葉が届かなければ、それは僕に力がなかったというだけだ。それでも、小夜には手を伸ばして欲しい。僕は手を伸ばした。後は、君が掴んでくれるだけでいい。

――いいよ。

蚊の鳴くような、か細い声。
「なにが、いいの」
「だ、だから、来てもいいって言ってるの。あんたが、朝日がわたしの病室に来てもいいって」
やった。届いた。
僕は喜びをこらえきれなくなって、おもむろに立ち上がる。それから、身体中の息を全て吐き出すようにして、全力で叫んだ。
「ち、ちょっとなにやってんのよ。恥ずかしい」
「あ、ごめん。つい、嬉しくてさ」
「ほんと、馬鹿なんだから」
そう言って笑う小夜の笑顔は、今までの苦しそうな笑顔じゃない。心から楽しそうにしている笑顔だった。
「今の笑顔、可愛いと思う」
だから、気づけばそんな言葉が口からこぼれていた。
「う、うるさいわね。いいから座ってなさいよ」
「へいへい」
これ以上言及しても言い返されるだけだろうと思って、素直に僕は再び腰を降ろした。
「これまでのわたしはこんな些細な幸せ、夜空の星たちみたいに手に入らないものだって思ってた。でも、本当はそうじゃなかった。手が届かないって思ってたことでも、案外すんなり届いたりするものなんだね」
小夜はそう言ってすぐ「今のは、独り言だけど」と付け加えた。

「そうだね。でも、自分から手を伸ばさないと、届くものも届かないよ」
くさいセリフだなと思った。だから僕も小夜と同じように「独り言だけど」と付け加えた。たぶん、小夜も同じ気持ちだったんだろうと思う。
そんなことを考えていると、右の袖を掴まれるような感覚があった。そちらに目をやると、小夜の細い指がぎゅっと服の袖を握っていた。もう、離さないと言わんばかりに。
「ともかく、今は星を見ていようよ。せっかく、こんなに綺麗なんだから」
僕は子どもに言い聞かせるように、そう提案した。小夜は言葉を発さぬまま、一度だけ首を縦に振った。

それから僕らは、明るくなるまで空一面を駆け巡る流星群を見ていた。
いつしか小夜は眠っていて、僕の肩に頭を預けている。昇りかけの朝日に照らされたあどけない小夜の顔には、一筋の涙のあとがあった。僕はそれをそっと拭いて、小夜を起こさないようにゆっくりとおんぶする。
相変わらず、小夜は軽かった。けれど、この軽い身体の中にはちゃんと、小夜の魂がある。そのことを、今の僕は理解していた。首筋にかかる寝息も、背中から伝わる鼓動も、全て小夜がここに居るという証だ。僕はそれを、一つ残らず自分の心に刻んでいきたいと思う。
そう決心して僕は、眠りから覚めつつある町へと続く道を歩き始めた。

―完―